
機械仕掛けの左腕

戒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機械仕掛けの左腕

【Nコード】

N1063Z

【作者名】

戒

【あらすじ】

2105年。様々な分野の技術が向上し、様々な能力を持つ人々の存在が容認された時代。

超能力を操る”超能力者”。

超能力者の劣化版と呼ばれる”感染者”。

何ら人と変わらぬアンドロイドなど、様々なものが現れ、造り出された。

様々なものが現れ、造られると同時に、それら使った犯罪も多発するようになっていた。

そんな時代を生きる一人の少年がいた。

彼の名は霧崎^{キリサキ} 灰斗^{カイト}。

昼間は学園一の問題の部活、非公式部で妨害工作や暗躍活動などに精を出し、生徒会&風紀委員&執行部と戦う日々。

家では、世話焼きで灰斗にベッタリな姉と猫かぶりの凶暴な妹、そして自称最高水準口ボなどと過ごす日々。

そして外では、学園で名高い三姉妹と仲良く過ごす日々。

そんな彼の本当の姿は……

この作品は、エブリスタにも投稿しています。

ブローグ

しかいいっぱいにひろがる、あかとにごったしろ。

やくまえのウィンナーのみたいなのとかくろくてブツブツしたの、
うすいかわにつつまれたピンクいろのもある。

はだいろのうらにはりついてるこいきいろのスポンジとピンクいろ
のあいだからみえるしろいなにか。

ぶによぶによしたまるいのに、はんとうめいのまくにつつまれたピ
ンクのプリンのようなものなにか。それとおんなじのがゆかにと
びちってる。

ハムみたいなのがちをながしてて、ぐちゃぐちゃになってる。

おとーさんはげんかんからかえってこない。

おかーさんはよくわかんない。

まいはこわれたにんぎょうみたいになってる。

ぼくは

バガンツ！

「誰かい」

「どう　し、た……」

「なっ！？」

なにかきこえる。また、みんなをぐちゃぐちゃにしにきたの？

「ひっ！～！」

「いやあああああああつ！～！～！～！」

なにかさけんでる？

「落ち着けっ。落ち着くんだっ」

「とにかく、中を確認するぞ。もしかしたら何かあるかもしれない」

「コツコツってあしおとがきこえる。」

もしかして、ぼくをぐちゃぐちゃにしにきたの？

みんなとおなじようにぐちゃぐちゃにしにきたの？

ぎいっておとがして、ドアがひらいてく。

「うっ！？」

「これは……酷い。酷すぎる」

おとなのひとがなんにんもはいつてくる。

みんなてっぽうみtainのもって、ぼーだんじょつききてる。

けーさつのひとかな？

「こりゃ生きてる奴なんていないぞ。みんな」

え？ いまなんていったの？

「奥さんとお嬢さんは
みたいだ。……絶対に許
せんっ！！」

「そうだな。でも、確かこの家には男の子がいたはずだぞ。探すんだっ」

たくさんのおしおとがある。ぼくをさがしてるの？ ぼくをぐちゃぐちゃにするの？

こわいつ。こわいよ。おとーさんっ！！ おかーさんっ！！ まいっ！！ みんなっ、みんなどこ！？

にげたいっ！！ みんなをさがしたいっ！！ でも、うごかないよ。

いたいよ、いたいよっ。たすけて……だれかたすけてっ！！

「っ！？ いたよ！！ 男の子だっ！！」

「なにっ！？」

「状態はっ！？」

「なんとか生きてるみたいよ。ホント、生きてるのが不思議なくらいの状態なのにね」

みつかった……。ぐちゃ、ぐちゃ、にされ、ちゃ……

ピッ、ピッ、ピッ、っとおとがする。

めがさめたら、まっしろなへやでまっしろなベットでねてた。

ぼくのまわりに、なにかたくさんものある。

「ん？ 起きたのかい？」

へやにしろいふくをきたおんなのひとがはいってきた。

おいしゃさんかな？

「どうかな？ 気分は」

「わかんない……」

「そっか」

おいしゃさんはいすにすわって、ぼくのちかくにいる。

「あたしは……怖いかい？」

なんでそんなのきくの？

ぼくはこわくなんて

あか、アか、あ力。

アカい水たマリとシロイの。ハむとピンク。スんぱジにウインなー。
ぐちゃぐちゃのグちゃぐちゃ。みんな

!!!!!!!!!!!!!!

!!!!!!!!!!!!!!

「こわいつ!! こわいつ!! こわいつ!!
おとーさんはっ!? おかーさんはっ!? まいはっ!? みんな
はっ!?!」

「チツ、錯乱状態かつ!!
落ち着けっ、落ち着くんだ」

おいしゃさんにぎゅってされる。

あったかい。

「大丈夫。君は生きてる。お父さんたちのことは……あとで教えて
あげる。だから、落ち着くんだ」

おいしゃさんがぼくのかおをみて、やさしくわらってる。

「いいね？」

「……うん」

おいしさんはぼくがおちつくまでぎゅってしてくれた。

……ちょっとたばこくさかったけど、いいにおいがした。

びよーいんからでれたぼくは、おいしさんのせんせーにてをにぎられて、しらないおうちのまえにきてる。

「今日からここが君の家だ」

「ぼくのおうち？」

せんせーはぼくのまえにあるおうちをゆびさす。

「そうだよ」

「おとこのひと、いない？」

「んゝ、いるけどみんな良い人だよ」

「おとこのひとがいるならやだ。せんせーといっしょがいいっ」

せんせーのあしにくつついてはなれないようにする。

「困ったねゝ」

せんせーはあたまをかきながらたばこをピコピコさせてる。

「あたしの家はあそこ」

ぼくのまえにあるおうちのとりにあるおうちをゆびさす。

「あそこなんだけどね、あたしはとっても忙しいの。だからあんまり家にいられないの。わかる？」

「うん……」

「あたしは君を一人にするのが心配なの。だからね、あたしの親友の家にしばらくの間君を住ませてもらうの」

「うん……」

「あたしが帰ってきたときは一緒にいてあげるから、あたしがいない間はこの家で待っててね。わかった？」

「……うん……」

「よし、いい子だ！」

せんせーはぼくのあたまをなでてくれた。

「じゃあ、行くよ」

「うん」

せんせーはぼくのをひっぱって、おうちのピンポンをおした。

すぐにドアがひらいて、なかからおんなのこがふたり、ぴよこって
かおをだした。

「だーれ？」

「だれ？」

「あたしだよ、志穂だ」

せんせーのなまえをきいたら、ちっちゃなほうのおんなのこがせん
せーにとびついてきた。

「しほちゃんだ」

「元気だったかい？ 葵っち」

「げんき」

ちっちゃなおんなのこは、うれしそうにせんせーとしゃべってる。

すこしおっきなほうのおんなのは、ドアのむこうからきょーみな
さそつにみてる。

「あつ、まってよ、おねえちゃん」

すこしおっきなほうのおんなのは、すぐにおうちのなかにはいろ
うとしてたけど、ちっちなほうのおんなのこにつかまった。

「じゃっ、あたしは先に中入ってるからね」

せんせーはたばこをピコピコさせながらおうちにはいつていつちや
った。

ぼくがせんせーがはいつていったほうをみると、ちっちなほう
のおんなのこがぼくにちかづいてきた。

「おうち、はいろ？」

ちっちなほうのおんなのこが、ぼくのをにぎってきた。

「え？ えと？」

「はいろ！」

ぼくはそのままおうちのなかにひっぱられてった。

「……………」

おっきなほうのおんなのこは、なにもいわないですぐちかくのドアをあけてへやにはいっていく。

ちっちゃなほうのおんなのこも、ぼくをひっぱっておんなじへやにはいっていった。

へやにはいると、せんせーと知らないひとがたのしそつにはなしてた。

「お？ 来たみたいだね」

「この子がアンタの隠し子？」

「へー、志穂さんの隠し子かあ」

「夫婦でボケんなっ！！」

スパパアアッ！！

せんせーがハリセンでふたりをおもいつきりたたいてる。

「志穂っ！！ アンタよく顔面叩いてくれたわねっ」

「まあまあ、良いじゃないか」

「良くないわよっ」

「いや、いんじゃない？ 良い感じに整形出来そうだし。もう一発
いっとく？」

「けたぐるわよっ」

おんなのひとが、せんせーとたのしそうにくみて？ をしてる。

「……………」

「お〜」

おつきなほうのおんなのこはムスツとしたかおで、ちっちゃなほうのおんなのこはおもしろそうにせんせーたちをみてる。

「そろそろやめないか。子供たちも見てるぞ？」

「ぜえ、ぜえ、へ？」

「はあ、はあ、は？」

おとこのひとがせんせーたちのあいだにはいつてふたりをとめる。

「あ、ああ。ごめんね〜。私としたことが、子供たちのことを忘れてるなんて……………」

「すまんな、チビども」

そういつておんなのひととせんせーは、テーブルのまえにすわって、ぼくたちをよんだ。

ぼくたちがすわると、おんなのひとがぼくのほづをみててをにぎってきた。

「はじめまして、私は柊^{ヒイラギ} 柚木^{ユキ}よ。よろしくね」

「ゆきねえさん？」

「あら？ うれしいことってく「オバサンだよ、オバサン」しいくほおく？」

またせんせーとゆきねえさんがくみて？ をはじめた。

「まあ、二人のことは放っておいてもいいよ」

おとこのひとはあきれがおでふたりをみてそういった。

「僕もはじめまして、だね。僕は柊^{ヒイラギ} 秋^{シュウ}って言うんだ。よろしくね」

「……………」

やさしそつなかんじのひとだけど、やっぱりおとこのひとはこわい。

「ん？　どうかしたのかい？」

ぼくがだまつてると、しゅうさんがぼくのかおをのぞいてきた。

「っ！？」

「大丈夫かい？」

しゅうさんはぼくのかおをみながらきいてくる。

「……………」

「あゝ、秋っち。ちょっと、ちょっと」

だまつてるぼくをしゅうさんがふしぎそつにみてるど、せんせーがしゅうさんをてまねきしてよんだ。

「なんだい？」

「ちょっといろいろあつてね。その子は人が怖いんだ。特に男が、ね……」

「……そっか。わかったよ」

せんせーとしゅうさんがなにかはなしをしてるみたい。

「ちょっと。その話聞かせなさいよ」

「柚木。今はまだ言えない」

「……そっか」

せんせーたちをみると、ちっちゃなほうのおんなのこがぼくのてをひっぱってきた。

「なに？」

「アタシはね、ひいらぎ あおいっていの。よろしくね！」

ちっちゃなほうのおんなのこは、あおいちゃんっていうんだ。

「かえで」

「え？」

おっきなほうのおんなのこもなまえをおしえてくれたのかな？

かえでちゃんっていうんだ。おっきなほうのおんなのこは。

「えと、ぼくは……」

「そう言えば、君はいくつ？」

ぼくもなまえをいおうとしたけど、ゆきねえさんにじやまされた。

「ぼくは１２さいです」

「……12歳には見えないわね。
どういふことなの？ 志穂」

「あゝ、その事情も今は言えないね。
まあ、強いて言うなら、過度の精神的ダメージが原因の精神不安定
状態だよ」

「ふうん」

ふたりはまたなにかのはなしをしてるみたい。なんだろう？

ぼくがかんがえごとをしてると、あおいちゃんがまたてをひっぱっ
てきた。

「なまえは？」

「あ、えと。ぼくはきりさき……」

「ん？ どうしたの？」

ぼくのかおをしんぱいそうなかおを試してみてるあおいちゃん。

「きりさき かいと」

「かいにい？」

「うん」

「かいにい」

うれしそうなおをしたあおいちゃんが、ぼくにベッタリくっついてきた。

「よかったね、葵。お兄ちゃんができて」

「うん！」

「楓は嬉しくないのかい？ 弟ができて」

「……………」

みんなたのしそう？　にはなしをしてる。

でも、ぼくのいもうとは……

「ん？　どうした、灰斗」

「いもうとはまいだよ」

「あゝ、新しい妹が出来たんだよ、新しい妹が」

「あたらしいいもうと……？」

「そつ。新しい妹だ。麻衣ちゃんの妹でもあるんだよ」

「……ぼくとまいのいもうと……」

「そつ。二人の妹だ」

「……わかった」

「よしっ、いい子だ」

せんせーがぼくの頭をなでてくれた。

「そして、私たちが新しい家族よ」

ゆきねえさんがてをひろげる。

「ようこそ、柊家へ。私たちは、灰斗君、君を歓迎するわ」

そして、ぼくにあたらしいかぞくができた。

第一話

「ふっ、あああ」

目覚まし時計を確認。

うむ、いつもと同じ朝の五時だ。

ちゃっちゃんと家を出る準備して学ランに着替える。

居間に出ると、見慣れた白髪に無表情の女性がお茶を啜っていた。

「お早う御座います、マスター」

「おはようさん、インフ」

無表情の女性の名はインフ。

自称最高水準のアンドロイドだ。

感情はあるのだが、あまり見せない。

というか、あまり感情の起伏がないのだ。

ちなみに服装は、チャイナ服。

よくわからんが彼女の趣味？ らしい。

ちよこちよこ服装が変わるのだが、コスプレかと思うような物ばかりを好んで着る変わり者だ。

「ようやく今日から復学ですか？」

「ああ、長かったよ。

つたく、たかが上級生を殴り飛ばしたくらいで一ヶ月も停学なんて思わなかったぞ」

「正確には、嫌がる女生徒を長期に渡ってつけまわし、襲おうとしていたため、その場に居合わせたマスターが上級生の下顎を砕いたから、でしたか？」

「そつ。さらに言うなれば、その場にいた上級生十人の下顎と骨盤を砕いてやっただけだよ。

つたく、下顎ぶつ飛ばしてサイツコーに笑えるツラに整形してやろうと思つてたのによお。力足りなかったみたいだわ」

「マスター。あまりその様なことを申されていますと、せっかく皆様が頑張つて停学で止めて下さった意味が無くなります」

「悪い、悪い」

茶を啜るチャイナ団子へアーロボに言われてもあんまピンとこんな。

無表情のままだし。

とりあえずオレも茶を飲み、鞆を持つ。

「んじゃ、オレは隣の姉妹の朝飯作りに行くわ」

「ならば私も行きます」

オレの言葉を聞き、インフも立ち上がる。

そのまま二人で並んで家を出て、隣に建つ柊家に向かった。

すでに見慣れた柊家。

小六から中三の冬まで過ごしたんだから当たり前か。

……まあ、ちょこちょこ居なかったけど。

オレは合い鍵をポケットから取り出し、慣れた手つきでドアを開ける。

「ただいま？」

「失礼します」

まだ寝ているのか、家の中は静かだ。

まあ、仕方ないことかもしれないな。今この家には大人がいないんだから。

姉妹の両親である、柚木姉さんと秋さんは仕事の関係で今この島を出ている。

そのため、今この家には姉妹と、こうして出入りしているオレとインフくらいしかない。

ちなみに、オレの保護者である志保姉は病院の仕事が忙しくてあんなま帰ってこない。

まあ、帰ってきたら帰ってきたで大変だけどな。

そんな事を思いながら朝飯を作っていると、階段の方から足音が聞こえてきた。

「おはよう、灰ちゃん」

「おはようさん、楓」

眠たそうに目を擦りながら、全体的に小さな少女がリビングに入ってきた。

彼女の名は楓。柊家の長女で、オレの一つ上の学年で生徒会長をしている、他称才色兼備のスーパー会長殿だ。

ちなみに、セミロングの茶髪は地毛だ。

まあ、全体的に小さいのと胸がアップルパイの厚みといい勝負してるくらいしかないのが玉に瑕だな。いや、ほかにも難点はあるんだけど……

「ちょっと、灰ちゃん。私はお姉ちゃんなんだから、ちゃんとお姉ちゃんって呼んでくれないきゃダメでしょ？」

頬を膨らませ、腰に手を当てる楓。

いや、そう言われてもなあ。ずっと姉なんて呼んでないんだから今更変える気はないしなあ。

「ちゃんと聞いているの？」

そう言っつて、また頬を膨らませる楓。

いつ見てもこの表情は可愛いなあ。この頬をパンパンに膨らませて顔を真っ赤にするの。

「聞いているよ、かえちゃん」

「あうっ」

オレがそう返すと、たちまち顔を真っ赤にして俯く楓。

なんでかな。昔っから楓か、かえちゃんって呼んでんのに、最近のかえちゃんって呼ぶと顔を真っ赤にすんだよなあ。

そんな事を思ってる間に、楓はオレがいる台所から離れ、リビングに移動していた。

「よしっ、出来た」

楓が起きて数分後、朝飯が出来た。

今日は気分的にピザトーストとベーコンエッグ（だっけ？ あの目玉焼きとベーコンのやつ……まいっか）とサラダにリンゴだ。

「楓、インフ。朝飯出来たから、どっちか葵を起こしてくれ。んで、残った方は朝飯運ぶの手伝ってくれ」

二人がいるリビングに向かってそう言うと、オレは朝飯を乗せたお盆をウェイターのように片手に乗せてリビングに向かう。

リビングに着くと、インフがオレの手からお盆を取り、テーブルの上に乗せながら口を開いた。

「マスター。M S・楓はお手洗いに向かわれました」

「ん、わかった」

「私が朝食を配膳しておきます。ですので、マスターはM S・葵を」

「あいよう」

ここはインフに任せ、オレは二階へと上がっていく。

葵の部屋の前に着くと、ドアを二度ノックする。

「葵。起きろ」

しいん

変化無し。せっかく擬音入れてみたのに。なんかむなしくなっただけか？

オレは気を取り直してもう一度部屋をノックする。

「おい。愚妹。サッサと起きろ」

うん。やっぱり変化無しか。

よしっ、突入準備だな。

カウントダウン開始。

三……

二……

一……

ゴーッ!!

勢いよくドアを開ける。

「葵っ、起きろっ!」

「んっ、んうっ」

ベットから声が漏れ聞こえるが、布団にくるまるだけでベットから出てこようとは思えない。

ほおっ、いい度胸だな。お兄様を怒らせたいのかなあ？

オレは、葵が眠るベットに接近していく。

「んう、すう、すう、すう」

「まったく、寝顔は可愛いのに起きたらオレ限定の暴力女だからなあ。
コイツは」

気持ちよさそうに眠る葵の柔らかい頬をつつき、寝顔を見る。

「んうっ」

眉根を寄せて、布団の中をモゾモゾ動く葵。

さて、そろそろこの暴力お姫様を起こすかな。

「オラッ、起きろ愚妹！」

「きゃんっ！」

オレは布団を掴み、勢いよくひっぺがした。

掛け布団の下から腰まである長い茶髪の少女が、冬眠中のヤマネミ
たいに丸くなった状態で出てきた。

「デメエ、なにしやがるっ！」

この口の悪い少女の名は葵。

オレの一つ下で、学園の付属に通う中三だ。

いつもピンクの生地に可愛らしいアニマル柄がプリントされたパジ
ヤマを着ていて、日がな一日パジャマで過ごすぐらいならだ。

暴力お姫様のクセにこういった服装が好きなんだよなあ。部屋にも
所狭しとぬいぐるみが並んでるし。

「サツサと起きろ、愚妹。朝飯が冷めるぞ」

「うるせえよ、クソ兄貴」

気の強さを表すかのような吊り目が、オレを睨む。

ヤバいな。空気が熱くなってきた。

「焼くぞ、テメエ」

「焼かれる気もなければ、お前にオレを焼けるだけの力もあるとは思えんな」

口ではそう言いつつも、背中を冷や汗が伝う。

「そうか、そうか。じゃあ……」

ヤバい。焼かれるっ！！

急いで背後にあるドアへと走る。

「くたばれ、クソ兄貴イイッ!!」

「ぐばおふあっ!!」

ベットのスプリングを利用して跳躍し、オレの無防備な背中に炎を纏う、灼熱ライダーキックをかましてきやがった。

「ギヤアアッ!!! 背中がつ、背中が焼けるうううつ!!」

皮膚が焼けるような痛みで廊下を駆け回る。

まあ、ホントは痛くにゃーでせうけどねィ。

あんの^{ファイヤースターター}発火能力者めえ。オレを殺す気か!?

なんとか廊下を這って階段を下り、風呂場に向かう。

サッサと上着を脱いで冷水で背中を冷やしていく。

火傷はないが、綺麗な青い痣がある。結構痛いんだよなあ、あの愚妹の飛び蹴り。

ていうか、あの愚妹の蹴りはかなり強力だ。

確か前に十枚の瓦を軽々と割ってた覚えがあるんだよなあ。炎なんてただのオマケの演出だし。

ていうか、炎いらねえだろ。足の周りに出しときながらそれは使わずに、わざわざ服の下に炎を顕現させて皮膚だけ焼こうとしやがって。

そんな事を思っていると、背後に何かの気配を感じた。

「マスター。お二人が食事を終えました」

なんだ、インフか。

オレは水を止め、背中の水気をタオルで拭い取る。

「そつか。じゃあオレもサッサとメシを……」

「大変おいしゅう御座いました」

「は？」

無表情で訳の分からないことを言うインフ。

「ああ、そっか。お前も食っ……………」

「大変おいしゅう御座いました」

だから、なぜにこのタイミングでそのような事を宣いやがるのかなあ？

服を着直したオレは、改めてインフを見てみる。

さっきと同じ団子チャイナ。特にこれといって変化は無いような……………ん？

インフの口元に僅かに何かがついてる。

「インフ。お前、口元になんかついてるぞ」

「それはおそらく……」

口元についたものを指ですくい取る。

「先程、M S・葵と分けて食したマスターの朝食かと」

「そつか、そつか………　　つと待て。お前、今なんか明らかにおかしい事言わなかったか？」

「いえ、特には……」

機械的に小首を傾げ、指についたものを舐めとる。

「オレのメシは？」

「大変おいしゅう御座いました」

「全部か？」

「M S・葵と私の体中に半分ずつ、大切な栄養分として摂取されました」

「低水準ロボ&愚妹どもめがアアアッ！！」

いくら心優しいこのオレでも、さすがにこれは怒髪天に來ちゃいましたよ〜〜。

ブッ！！ コッロスッ！！！！

オレは二人に、オレ的正義の名の下に制裁を加えるべく、洗面所から出る。

まずは愚妹からだ。

アイツが発端にして元凶なのはすでに今までの経験が物語っていやがるんですよっ！

ズカズカと乱暴に廊下を歩いていく。

リビングのドアに手をかける。

ふっふっふっ。目に物見せてやるぜい。

テンションを上げ、兄として愚妹に教育してやるうと意気込む。

だが、この時オレは気づいてなかった。

オレの背後から魔の手ならぬ、魔のチョップが振り下ろされようとしていることを……

ズドムッ!!

「ガハッ!?!」

背後からの確に、我が脳天に鋭く重い手刀が振り下ろされていた。

「マスッ」

ズドムッ!!

「ガハッ!?!」

「ターッ」

ズドムッ!!

「ガボッ!!」

的確且つ高い攻撃力を誇る殺人チョップによって、立っていられなくなっていく。

「誰ッ」

ズドムッ!!

「ぐぼふっ!!」

だが、このバカロボの殺人チョップは、崩れゆくオレに一切の情け容赦もなく、チョップを決めてきやがる。

「がッ」

ズドムッ!!

「ゴボッ!!」

しかも、高威力が原因で何度も体勢崩れて位置がズレるオレの脳天に、的確に一片の容赦もズレもなく繰り出してくる。

「低ッ」

ズドムッ!!

「ぐばはっ!!」

オレ、コイツのマスターだよな？

「水準ッ」

ズドムッ!!

「ぐぶふっ!!」

自信なくなりそ

「ですッ」

ズドムッ!!

「ごぼほっ!!」

ヤバイ、意識が……

「かつ」

ズドムッ!!

「ごぼふあっ!!」

テレレレ、テレレレ、テレレレ、テレレレ、テレレレ

どっかからそんなゲームオーバーチックなBGMが聞こえてくる。

「殺った？ インフ」

意識が混濁しつつあるオレの耳に、愚妹の声が聞こえる。

「いえ、まだ意識が残っているはずです」

いつもと変わらぬ、無表情に死んだ魚のような目、抑揚のない声で愚妹に答える低水準。

「じゃ、トドメ」

可愛らしく死刑宣告を告げ、愚妹が大きく腕を振り上げる。

霞む視界の中で、確かにオレは見た。

愚妹の手から、少し大きなラジカセが高速で放たれ

メギッ！！

「ぎよわああああっ！！！！؟؟？」

世界で最も尊いオレの頭が無事であることを祈る暇さえ与えられず、
オレは意識を失った。

第二話

「あんの遺伝幼女めがっ」

こぶができた後頭部をアイス枕っぽいので冷やしながら、教室の机に突っ伏す。

「よお、灰斗。また葵ちゃんにやられたのか？」

笑いを堪えながらバカがやってきた。

この全身からバカを放ち続けるバカは赤城^{アカギ} 渡瀬^{ワタセ}。跳ねまくって
る赤く染められた髪に、バカが溢れて止まないバカだ。

「黙れバカ。無駄にバカ。変態バカ」

「ちよっ、バカ多くね!？」

「事実だ、人類史上最もバカで見るに耐えない変態バカ」

「……それってなんか凄くね？」

オレの机に乗りかかるんじゃないかと思うくらい勢いよく突っ込んでくる渡瀬。

「貶してんだよ。気づけ、バカ」

「ひでえよ……」

泣きそうな顔で崩れ落ちるバカ。

正直、見るに耐えないウザさなのでいつものようにゴミ箱に突っ込んで差し上げよう！

ああ、なんて優しいんだオレは。神様顔負けの優しさだ。

一通り自画自賛をしたオレは、うずくまっのの字を書いているバカに近づいてみる。

あまりのキモさに誰もが避けて通っている。

さて、どうやって捨てようか……

オレがそんな事を考えてると、背後からぬうつと何かが現れた。

「この見るに耐えないバカはどうしたのだ？ 霧崎氏」

「うをつ！？ ビックリした。なんだ、貴樹か」

コイツは桐生 貴樹^{キリユウ タカキ}。常に悪巧みをしていそうな顔をしている男だ。事実、コイツは常に悪巧みをしている問題児だ。

ちなみにコイツは、相手の名前の後に必ず氏^{ウジ}をつけて呼ぶ変わり者だ。

この二人はオレの悪友で、よく三人で連nderる。

「で？ これは何だ？」

ぐずぐず鼻を嚙りながらのの字を書き連ねている渡瀬を指差す。

「いつも病気だ」

「ならば、ゴミ箱行きだな？」

そういつて手際よくゴミ箱を持ってくる。

各教室には、分別をするためにいくつかのゴミ箱がある。燃えるゴミ。燃えないゴミ。ビン。カン。ペットボトル。この五つだ。だが、この教室、というより渡瀬が存在する教室には必ず”汚物用”とデカデカと書かれたゴミ箱がある。これは渡瀬専用のゴミ箱だ。貴樹は、渡瀬専用であるこのゴミ箱を持ってきたのだ。

「さて、この汚物を詰め込むか」

オレは渡瀬^{バカ}の……いや、もうコイツの呼び名はバカでいいや。それを通るし。

オレはバカの空の頭を……いや、違うな。バカと変態とエロとキモさとetc・とetc・で構成された頭を掴み上げる。

「貴樹。セツトアップ！」

「オ~~~~ケ~~~~イ!!」

貴樹は汚物用ゴミ箱を傾け、ダンプがしやすいようにする。

「トライツ!!」

バカの体を宙に浮かせ、右の拳をバカのドテツ腹を殴り飛ばして差し上げる。

「ぐぶえっ!!」

体がくの字に折り曲がり、汚物用ゴミ箱にケツから入っていった。

「出来上がり」

ゴミ箱から足と上半身のみが出たバカヤドカリ、略してバカガリが出来上がった。

「喜べ赤城氏。貴様のような汚物に似合った巣を手に入れられたのだ。泣き叫んで喜べっ!!」

高笑いをしながら、貴樹がバカの巣をガンガン蹴ってる。

あんま蹴ると倒れ……

ガタンッ！

「イッテエエエエエッ！！」

やっぱり倒れたかった。

はあ、バカがぶつけた側頭部をおさえながらなんか喚いて殴りかかろうとしてるけど、ゴミ箱という名の巣に詰められてるからカッコ悪いし、あそこからは動けんだろうな。

「ハハハハハハハッ！！ 赤城氏。貴様如きがこの俺に触れられるとでも思っているのかっ！！」

妙に力強い声を上げ、貴樹がバカの顔面にハリセンによる高速往復叩きをキメてる。

「ブッ！！ ゲブッ！！ グボハッ！！」

段々バカのツラが赤くなっていくが、貴樹は「整形だっ！！」と力強く言い放ち、授業が始まるまでバカのツラをさらに叩き続けた。

……え？ 止めないのかつて？
バカを言うんじゃないよ。これがいつもの朝なんだ。止める気もないし、学園関係者ですら渡瀬〃バカ&変態で通ってるし、バカか変態でみんなわかるくらいこの学園じゃ常識の存在なんだからいいんだよ。

第三話

昼休みを告げるチャイムが学校中に響き渡る。

「よっしゃ終わったぜえええ!!」

と同時にバカが雄叫びを上げた。

毎度の事ながらうるせいな、あのバカは。

「メシ食いに行こうぜ、灰斗」

バカが電光石火で接近してきた。

ウチの学園は大学の付属で中学からある。

中高大学は個々に購買があつて、食堂は中高大学共有だ。

「悪いな、バカ。今日は愚妹作の頑張りましたよ弁当だ」

「なぬっ!?!? 愛妹^{アイマイ}弁当だと!?!」

「っと待て。なんだその愛妹って」

「愛妻と同じ様な意味だ！」

やっぱこのバカの思考回路は常人でなくてもわからん。
一回カツ捌いてみるか？

「まあ、訳分からんバカなことをほざくのはいつものことだからよしとしてやろう。

んじゃあオレは行くからな」

そついつて席を立ち上がろうとしたとき、教室のドアが開いて我が狂暴なる愚妹が侵攻してきた。

猫かぶり全開の優等生スマイル（しかも他者には決してバレないという特殊スキル付き）で近付いてくる。

「どうして昼休みになったのにいつもの所に来ないんですか？ 兄さん」

にっこりと優等生スマイルで問いかけてくる。

「ん？ ああ。それはな、このバカに捕まっただからだ」

中指を立て、バカを指差す。

「なぜに中指！？」

とりあえずバカは永久無視の方向で。

「そうだったんですか。」

「すいません、赤城さん。いつも兄さんが迷惑かけて」

「いや、迷惑かけてきてんのはコレの方だぞ」

「そうだぞ。オレにあんまり迷惑かけるな」

「黙れ愚民」

「しどいっ！ー！」

よよよっ、と泣きマネをしながら女座りをするバカ。

正直、キモいのレベルを軽々と跳躍して次元すら超えてるからなんて言えばいいのかわなくなってきましたよコンチキショウッ。

「相も変わらず大変だな、霧崎氏」

ぬうつと、我が死角たる右斜め後ろから幽霊のように出現する貴樹。毎度の事ながらいつからいてどこから現れるか分からんヤツだ。もう慣れたつもりでいても、やっぱりビックリする事はある。まあ、今回ののはなんとなくいそうな気がしてたからなんともないけどな。

「なあ、貴樹。このバカ、いつものとこに捨てに行くか？」

「いゝいですなあつ。

いいですなあつ！

いいですなあツ！！

いいイイですなあアアツ！！！！」

無駄に、且つ意味不明にテンションが上がっていく貴樹。さすがは変人。といったところだろうか……

「というわけで、だ。このバカを処理してくるから葵は楓んとこ先に行っといってくれ」

「え？ え？」

一人事態についていけない愚妹が、オレたちを交互に、特に縄ではなく、なぜか有刺鉄線をぐるぐる巻きにされているバカを気にしていたが、教室からサッサ追い出して差し上げた。

「捕縛完了！」

どこからともなく取り出した有刺鉄線でバカを生け捕った貴樹が、声高々に宣言する。

「よしっ。んじゃあ、この恍惚ド変態クソバカカスを処理しに行くか！」

汚く、且つ重度の吐き気と目眩などがいとも簡単に引き起こせるほどキモチワルイおぶ……汚物に付けられた首輪に紐をつけ、ずるずると引きずって校舎を出る。

校舎裏には、今も現役で動く古びた一昔前の焼却炉がある。オレたちの目的地は、もちろんそこだ。

さっさと校舎裏に回ったオレと貴樹と変態B A K Aは、ちよつとめんどくさいことになっていた。

「この間はよくもやってくれたな？ え？ オイツ」

二十人の不良が現れた！

なんてドラ エ風に言ってみたが、要するに二十匹のやんちゃ坊主共に囲まれているのだ。

しかも、全く見覚えもなければ身に覚えもない。

「なあ、オレ等なんかしたっけ？」

「さあな。悪いが俺には身に覚えがない」

「そりゃそうだろ。貴樹はオレ等と違って頭脳労働担当なんだから」

お互い、こんな奴ら知らないよなー、と言っていると、バカがいきなり口を開いた。

「すまん。アイツ等ヤツたのオレだわ」

申し訳なさそうにそんな事をほざくんで、

「どうぞ、皆さん。煮るなり焼くなり引きずるなり、裂くなり卸すなり穴だらけにするなり、そりゃあもう好きにやってっちゃって下さいな」

「下さいなッ！！」

やんちゃーズに献上して差し上げることにしました、マル

「って、おーいっ！！ 見捨てるなよっ！！ 友達だろ！？」

「……トモダーチ？ アー、ソーリー。ワタシニホンゴワカリマセエエエン！」

「ワカリマセエエエン！！」

「ちよっ、何片言になってんだよ！ しかも貴樹までっ」

「ヤッパリイ、ニホンゴムツカシイデエエス！」

「ムツカシイデエエス！！」

いい案配決まったらやることは一つ。

オレと貴樹はバカを踏みつけ、ハイタッチを交わす。

「踏むなッ！！　そして復唱すんなああああッ！！」

足元でバカが騒ぎだしたんで、とりあえずMIZOOTIを踏みつけて黙らせて差し上げた。

嗚呼、なんて優しいんだオレ。後光が、今オレの後ろから後光が射してるゼイ！

「さて、神が如く慈悲深いオレはこの場を去らせてもらおう」

「ふむ。確かに、バカに用があるのならば俺達には関係無いな」

（バカを献上して、サッサと立ち去るが吉だな）

（そうだな。我が相棒よッ！！）

オレ等はアイコンタクトを交わし、バカを蹴り飛ばす。

「げふんっ」

変な音を発して無様に転がるバカ。

さて、オレ等はサッサと退散しますかね。

オレと貴樹は踵を返し、帰ろうとすると、やんちゃーズが無礼にもこのオレ様に声をかけてきやがった。

……が、聴覚をシャットダウンして無視する。

「貴樹く、ヤニないか？」

「悪いが俺は煙草は吸わんのぞな。持ち合わせてはおらん」

あー、そういえばそーだったなー。

「煙草ならオレ持ってるぞ」

「なぬっ!？」

聞き捨てならぬ言葉が、背後からバカの発せられる。

オレは速やかにバカの下へと駆け寄り、煙草を奪取して元の位置へと戻る。

「なっ!？ テメツ、煙草盗るだけかよ!! 助けねえのかよ!!」

オレはゆっくりと振り返り、全宇宙の常識をこのバカへ教えてやることにした。

「何言ってるんだ？ オレが他者を、特にバカと男を助けないのは知ってるだろ？ つか、それ以前にオレが他者と行動を共にするのは奇跡に等しいことなんだ。それだけでも喜べ。そして敬って奉つて、媚び諂え。このクソ虫がッ」

「そ、そこまで言うか？ フツ」

「言ッッ!! 何故なら、オレは普通じゃないからだッ!!」

何故か辺りに沈黙の帳? が落ちる。

「……力説するところか? そこ」

「当たり前だ。オレがお前等と連む理由は……わかってんだろ?」

意図せずして、声が低くなる。

ちっ、やっぱまだダメか。

「そうだったな。すまん、オレ忘れてたわ」

オレの隣で、バカが空の頭を下げる。

「まあ、オレは神が如く慈悲深いから」

たっぷり溜め、会心の笑みで下知を下した。

「学校の床という床を全部舐めてきたら許してやろう」

「鬼ッ、悪魔ッ！！」

「はっはっはっ。何を今更なことを言っているのだ、赤城氏」

「全くだ」

感極まって震えるバカを見下ろしながら、オレと貴樹の笑いはいしばらく続いた。

第四話

一通り笑い終えたオレ達は、とりあえずやんちゃーズにバカを再献上して差し上げようかな、とかなんとか思ってみたりみなかつたりしてると、やんちゃーズの方からなんか今更なことが聞こえてきた。

「なっ、アイツ瞬間移動能力者だったのか!？」

「フッ、何を今更に……」

「バカは黙っている」

「そうだ、バカ汚物は黙ってる」

「ひでえっ」

なんか醜いのが打ちひしがれてるけど、とりあえずその存在そのものを無視する方向で。

……もっかい、有刺鉄線でボンレスハムにしたるかや？ ま、いや。キメエし。

「それにコイツの能力は瞬間移動じゃないぞ」

「なに？」

「サラッと無視ですかっ!？」

『バカは黙ってるッ!!!』

「うあい」

オレ達だけじゃなく、やんちゃーズにまで口を揃えて言われちゃあ、さすがのバカも傷ついたらしい。

……珍しいこともあるもんだ。臍物シャワーでも降るか？　こー、なんていうか、ベシヤッ、って。

……降るわけないか。

「じゃあコイツの能力はなんだよ？」

「貴様等如きやんちゃーズに教えてやる義理など無いわっ」

「無いわっ。ちなみに奴は超能力者だ。と、だけは言っておこう」

『なにっ!?!』

やんちゃーズが口を揃えて驚いてるよ。

あっはっはっはっはっ……………。キメエ。

でもまあ、驚くのも無理はないか。だって、超能力者指定されるほどの能力者は二十人しかいないからな。

ホントは番の能力があるから二十人じゃないんだけど、あれはもう片割れがないから能力者でもなんでもないだ。^{ツガイ}

そう、なんでもないだ。

「おーい、どうしたかいドブフォッ!」

声が聞こえてきた方向に向けて鉄拳制裁を加えて差し上げる。

嗚呼。まったく持ってなんて優しいんだこのオレ様はッ。

「まったく、声をかける時は半径百メートル四方は離れると言っているだろっ」

「そんなの今聞いたわっ」

「今新たに加えたんだから当たり前だっ」

「なんて理不尽っ」

よよよっ、と崩れ落ちるバカ。正直もクソもへったくれも無いくらいキメエ。

と、そんな事をしていると、少し間の抜けた定番の音が聞こえてきた。

《ぴん、ぴんぽんぽんぽおっっん》

訂正。声でした。しかもこの声って

《灰ちゃん、灰ちゃん。お姉ちゃんおなかすいちゃったよ。早くご飯食べよーよ》

やっぱり、楓か。相変わらず公共物を私物のように扱ってるなあ。オレが関係するときだけだけど。

《じゃあ、いつもの所で葵ちゃんと待ってるからねえ。ぱんぽんぴんぽん》

あー、なんか皆さんアホヅラ晒してますねえ。

まあ、無理もないか。ファンクラブなるものである我が会長殿からの名指しのラブコールだ。羨ましくてたまらないんだろ。

《ちょっと、お姉ちゃん！ また兄さん呼ぶのに放送使ったの！？》

お？ 今度は我が凶暴なる愚妹の声だな。

つか、楓。放送のスイッチ切り忘れてるよ。

《あつ、葵ちゃん！ 今、灰ちゃん呼んだところだからもう少ししたら来るよ》

《そう言う事じゃなくて 》

《今日のお弁当。灰ちゃんに食べてもらいたくて頑張って作ったんでしょ？》

《なっ！？ 何言ってるの！？ べっ、別に兄さんなんかのためになんてっ》

《え？ 違うの？ 灰ちゃんの好きなものばかり入ってたから、てつきり灰ちゃんのために作ってきたと思ってただけど……》

ほほう、今日はオレ好みのお弁当か。

つか、このままだと姉妹の会話がただ漏れだけでなく、オレの命が危なくなる。

二人のファンクラブとか言う得体の知れない狂気の集団に殺される
っ。

オレの……オレの命がッ。

世界で最も尊いオレの命がッ。

そうと分かっていたらやることは一つ。

今から放送室に乗り込んで二人を止めて、メシ食って、更にファンクラブなるものから逃げる。

これでOKだ。

そうと決まればバカとやんちゃーズは放っておいて、さっさと

《なにやってるの？ 楓、葵さん？》

「ん？ この声って」

「まさか……アイツかつ」

この声はまさか……。

生徒会副会長にして風紀委員長の、

《くくりちゃん！》

《薙原先輩！》

オレのナギハラ薙原くくりかつ！？

くそっ、まさか副会長が出てくるとは。

《まったく。また公共物を勝手に使っちゃダメでしょう？》

《ううっ》

《葵さんも。ちゃんと楓を止めてくれなくちゃ困るわ》

《はい……》

副会長が二人に説教してる間にオレは速攻で放送室に向かわねばっ。

副会長のファンクラブ、えっとなんつつたっけ？ とりあえず、なんとかって言うファンクラブも出てきたら限りなくやっかいだ。

それに副会長には人質取られてるし。

早くいかんと何を言われることが。

《それと、そこに木琴あるわよ》

《ふえっ！？》

《……ホントだ》

……二人揃って木琴の存在に気付いていなかったとは……。哀れなり、木琴。

つと、こんなことをしている暇はねえつ。

「貴樹、バカ。オレは放送室に行くからあと頼んだッ」

「うむ。この場はバカに任せておけ!!」

「オレ任せ!？」

無駄にデカいリアクションでバカが反応してるけど、いつも通り完全無視の方向で。

「自覚はあったのだな、バカ氏」

「自覚はあるつ。そしてオレの名字はバカじゃねえッ!!」

はあ。コイツ救いよう無いな。バカだし。

つと、いかんいかん。こんなことしてる場合じゃない。

オレはこの場をバカに押し付け、走り出す。が、

「待てや霧崎!!」

やんちゃーズの内の一匹がオレの前に立ちふさがってきた。

とりあえず、殴るっ。

「ぶッ!？」

右ストレートが綺麗に顔面に決まった！ 効果はバツグンだ！

「チッ、手が汚れた」

無様に鼻血を垂れ流して寝てるやんちゃーズその1から離れ、バカ
のカッターで血を拭う。

「ちょっ、おまつ!？」

「……かえって汚れたか？」

「
」
「うむ」

うんうんと頷く貴樹。

やっぱ、汚れるか……

「うむ。じゃねええええッ!」

と、いきなりバカが吠えた。……キチガイにでもなったか？

「うるさいぞ、バカ」

「舌を噛んで喉を裂いて声帯いじって黙れ」

「それは死ねって事か!？」

……は？ 何をそんなオーバーな反応してんだ？ オレはただ一番手つとり早い解決方法を述べただけなんだか……

「まあ、そんな事はどうでもいいか」

「オレの命ってどうでもいいレベル!？」

『黙ってるっ』

「うあい」

再び全員から集中攻撃を受けるバカ。

若干哀れだな。若干。

って、マジでこんなことしてる場合じゃねえっ!!

急いで体を反転させ、走り出す。

「待てや霧崎イツ」

やんちゃーズのリーダーらしき傷物スキンヘッドが、オレに向かって腕を振ってきた。

それと同時に、拳大の火球が飛んでくる。

「効くかボケエツ!!」

即座に左右のヒップホルスターから銃を抜き、対能力用強化ゴム弾

を火球に叩き込む。

ゴム弾にぶつかった火球はゴム弾を焼くだけに留まり、オレに触れることはなかった。

「なっ!？」

傷物スキンヘッドが醜いツラを更に醜く歪め、驚いている。

「対能力科舐めんなッ」

再び引き金を引き、連続でゴム弾を額に叩き込む。

「ガッ!!」

叩き込む。

「ガガガッ!!」

傷物スキンヘッドは大きく仰け反る。

そのまま体の中心線に沿って上から順にゴム弾を叩き込んで、更に上体を反らせる。

「ガアッ!!」

バカみたいに大口開けたのを見て、前歯に一発のゴム弾を撃ち込む。

「ッ!!!?!」

跳弾したゴム弾がロン中に入ったらしい。傷物スキンヘッドは、無様に地面に叩きつけられ口を押さえて転げ回ってる。

「ぼっ、ボスッ!! 大丈夫ですか!?!」

その他のやんちゃーズが傷物スキンヘッドに駆け寄っていく。

つか、ボスって……弱っ!

「あと頼むわ!」

「おー」

「うむ」

二人の……ごめん、間違えた。一人と汚物の怪音を聞いたオレは、銃をホルスターに突っ込んで上着で隠して走り出す。

一応銃は校則違反だしな。バレるといろいろ面倒だからな。

それに、この銃も対能力用ゴム弾も自前だからな。取られると困るんよ。

と、そんなことを考えている間に、校舎に突入した。

さっきの放送のせいか、周りの生徒共の視線がメツチャ痛い。

絹糸で編まれたオレのハートは、ガラスのハートより脆いんだよ。

繊細なんだよ。

だからそんな目で見ないでくれ。

ちよいい優越感が生まれてきちゃいますでしょうが！

生徒という名の愚民共から、いろんな意味でアツイ視線を送られる
オレ。

フツ、モテる男は辛いゼイ！

……男共はオレを見るなっ！！ 清らかなオレの存在が汚れるっ。

オレを見やがる男共を一人一人丁寧に殴って差し上げたいところですが、放送室も間近なんで我慢します。

オレ優しい！ オレの優しさを、敬って媚び諂っえ、愚民っ共

《それにしても遅いわね、霧崎君》

《今急いで来てるんじゃないですか？》

《早くー。お姉ちゃん、お腹と背中がくっついちゃうよー》

ふふふつ。待つてなさい楓。今みんなの神様、霧崎灰斗様が突入するぜイ！

オレは勢いをつけ、放送室のドアに蹴りを入れた。

「みんなの神様、霧崎灰斗様参上！ さあ、放送のスイッチを切りなさい！」

つて、あれ？ いない？

どこを見回してもちびっ子姉妹も副会長もいない。

……なぜに？

《もしかして、灰ちゃん放送室に行ったのかなあ？》

《兄さんバカだからありそう》

しまったアアアアッ！！

そういえば、放送室以外にも放送流せるところあったんだったアツ！！

《早く来ないかしらねえ？ 私もお腹が空いてきたわ》

《薙原先輩は先に食べてて下さい。どうせ兄さんはケンカでもしてるんでしょうから》

《ええっ！？ 灰ちゃんイジメられてないかなっ！？》

《大丈夫でしょう。霧崎君はよくケンカしているみたいだし》

《そうそう。兄さんはケンカくらいしか取り柄無いんですから》

おぬおるえゝ。好き勝手言いやがってえゝ。

オレは即座に方向転換し、生徒会室に向かう。

放送室以外で放送を流せるところって言ったらあそこしかナッシング！

《本当、早く来ないかしら。私、彼に言わなくちゃいけないことがあるのに》

《何々？》

なに好奇心いっぱいに訊いてんだよ楓っ。

《歩く校則違反こと霧崎灰斗君。聞こえてるかしら？》

「誰が校則違反だッ」

オレがつ、いつっ、どこでっ、校則違反したッ！！

……いや、してるか、校則違反。銃とか、ゴム弾とか。

でもバレてないはずだし……なんだ？

《ケンカや迷惑行為に飽きたらず、髪を染め、更にはカラーコンタクトまでつけるなんて……》

いや、いやいやいやいやいや。これ地毛ですよ？ 地目ですよ？

ハーフですよ、ぼかあ！

……いや、見方によってはクォーター？

ってか、自前だって知ってるだろ！？

コンチクチクショウツ。副会長のくせに、副会長のくせー。

放送室に来たときの倍くらいのスピードで階段を駆け上がる。

つつても、運動神経いいわけじゃないから大して変わらんけど。

《染めるなら金髪とかにすればいいのに、なんで灰色なのかしら》

だから地毛だとゆうとりますでしようが！！

ダークグレーの何が悪いっ。

《灰ちゃんはハーフさんだよ？　だから髪の色が灰色なんだよ？》

《でも、兄さんハーフなのにあんまりハーフっぽくないんですよね》

《確かにそうね。髪と目以外は日本人と大して変わらないし》

そのどこがいかんのじゃー!!

全く。オレは親父似なんだよ。麻衣はお袋似でお前らの言うハーフっぽさがあるけどねっ。

……麻衣。麻衣。麻衣。麻衣。麻衣。麻衣。麻衣。麻衣。麻衣。麻衣。麻衣。麻衣。……ごめん。ごめんな。お前を守ってやれなくて

……

ハッ!! いかん、いかん。危うくスーパーネガティブモードに突入するところだった。

オレは気持ちを切り替え、ラスト一直線の廊下を駆け抜ける。

トトトトトト

ん? なんか大人数の足音が、聞こえるような、聞こえるような?

『霧崎イイイイ!!』

「うおっ!？　なんかキモい集団来た!!」

男ばっかのムサキモ集団がものっそいスピードで走ってくる。

なんで男ばっかなんだよッ!!

って、そりゃそつか。ウチの学園特殊だもんな。

普通科は男女共学だけど、うちの校舎からは離れてるし。
能力科と対能力科は男女でのデータの違いを見るために男子校舎と女子校舎に別れてるし、委員会とかでもない限り能力科と対能力科の男女が一緒にいることなんて

って、待て。ちょい待て。

ここって、生徒会とか風紀委員会とかの専用のとこだよな。

どっちかに所属してるか、どっちから許可をもらえないと入れないはず。

コイツらいたいどこから

ドドドドドッ

って、ちょい待て。またちょい待て。

なんか向かい側から女子の軍団が走ってくるぞ!?

なんかメツチャ怖いんですけど……

「不良如きが私達のくくり様につ」

「楓さんにつ」

「葵ちゃんにつ」

『近付くなああああ!』

いやああああ!!

男子ファンクラブ、女子ファンクラブ両方来ちゃいましたよ!?

くそう。あとちょいで生徒会室なのに。

すでに生徒会室のドアは女子ファンクラブの波に飲まれてるし、後ろは男子ファンクラブに固められてる。

いつもは仲が悪いこの集団は、こういう時に限って無駄に息ピッタリなんだよなあ。

「その不良！ 今すぐこの場を離れなさいっ」

女子ファンクラブのリーダーらしき可愛い子ちゃんが、このオレを指差してきやがった。

「オレを指差すなあ！」

全く。オレを指差すなどとは……。どっいつ教育を受けてきたんだよ。

ここは一つ、ちょうきょ……う教育して差し上げねば。

「いいか？ よく聞けイ。人を指差すのは構わない。しかし。しか

し、だ。このオレを、この後光輝くこのオレを指差すのだけは許さんっ」

かわい子ちゃんを指差す。

「何を訳の分らないことを言っているのかしら？ 頭沸いてんじやない？ て言うか、中指で人を指差さないっ」

「黙れナイチチ！！」

「なっ！？ 誰がナイチチよ！！」

ナイチチのかわい子ちゃんが茹で蛸になってサル化してる。

いや、サルってほどでもないか。むきーむきー言ってるだけだし。

「無いだろ実際。全体的にカワイイし、キレイな顔立ちしてるし、肌も髪もちゃんと手入れしてるみたいだけど」

ここで大きな大きなかぶりを振る。

「チチ無いだろがッ!!」

お？　なんか雷に打たれたみたいになってる。

ここは一丁あれやりますか。

はい、せーの。

ピシャアアアアン!!

はい、ありがとうございました。

ふう。にしても面白い奴だな。さっきまで顔真っ赤にしてくっつけた指を忙しなく動かしてたのに、急に雷打たれたみたいになってたりして。

……疲れんのかな？

オレは神が如き慈悲深さを持つてるから心配で心配で

「ふええええん!!　不良に汚されたああ!!」

「うえええええええええ！！！？」

なんで？ どうして？ なんなのさ！？

オレはただバカ直伝の「女は誉めればいいのだよ」と、貴樹直伝の「誉めの中に若干の毒を織り交ぜるのだつ」を实践しただけなのに

-
-
-
-
-
-

しかも全く馴れてない「誉め」を使ったのにはあれはないでしょうが！

くそう。やっぱバカ直伝は使えなかったか。

「こんのつ、不良!! 矢枝ちゃんいじめるな!!」

なんかナイチチが泣きついてる女子がこのオレを指差してきやがった。

つか、ナイチチは矢枝って言うのか……

まあ、別にどうでもよかことなのよね。

……ん？ あの女子は確か

「聞いてんのっ？ 不良、霧崎灰斗っ！」

あー、やっぱり副いんちよだ。

「副いんちよ。オレを指差すとはいい度胸だな。中三の最後にやったあの恥ずかつすうい画像をネットにバラしちやるか？」

ケータイをちらつかせ、副いんちよに迫る。

「ちよっ！？ アンタまさか」

副いんちよの顔が凍り付いてるぜイ！

ここはもう一撃入れて差し上げねば！

「にゃんにゃんー！」

手を猫手にして、にゃんにゃんをやる。

もちろん、首を傾げるのを忘れないぜっ。

「 つ！！！？？」

ふふふ。あのお堅いことで有名な副いんちよがにゃんにゃんやったんだ。誰もが見たいだろな。

その証拠に、さっきから後ろで意味不明に喚いてたオス共が更に理解不能な雄叫びを上げてるしな。

正直、ウルサクウザいことこの上ないのよねイ。

しかも、副いんちよも思い出したみたいで茹で蛸化してる。

腐っ腐っ腐っ。あ、やべっ。間違えた。

ふっふっふっ、あれは実にオモロい思い出だよ。

ウチのインフが部屋に引き伸ばして貼ってあるくらいだしな。

いやあ、もっかい見たいなあ。副いんちよのにゃんにゃん。

あれはかわいい子ちゃんがやるより、美人タイプの強気っ子ちゃんがやるのが一番だぜイ！

って、副いんちよにベタ惚れなバカとコスプレロボインフが絶賛してたな。

オレも貴樹もあれには大爆笑したし、満場一致でもっかい見たいんですよ。

「っと、こんなことしてる場合じゃナツシング！早くせんとオレの大事な昼食タイムが無くなるっ」

ケータイをポケットに突っ込んで、もう一つの方のポケットに手を突っ込む。

「まっ、待ちなさい不良！」

「フツ。待てと言われて待つ奴がどこにいる！」

ポーズもバツチリ決まったぜイ！

「黙れ霧崎ッ！」

「寄るなゲス共ッ」

人が折角決めポーズを決めてるってのに、汚いオス共が寄って来やがった。

「それ以上近付くなよ。近付いたら撃つぞ」

オレは片手を銃の上に置く。

でも、このカス共はオレが銃を携帯してることも知らなければ、対能力科の中でも下位に入るオレが特別クラスにいる理由も知らないんだ。

いや、違う。ちゃんと知らせてあるけど、それを理解しようともせず勝手な噂を流しまくってるバカ共だ。

だから、オレがどんな状態か知らないんだ。

全く。これ以上近付かれると、本当に撃っちまうな……

遠慮もなんもなく二つの集団はオレに近付いてくる。

チツ。しゃあないなあ。

ポケットから、ボール状のアイテムを取り出す。

手の中にあるのを確認し、その手を振り上げる。

聴覚遮断。視覚遮断。

「くらいい！ 必殺、閃光滅閃弾！！」

ネーミングはインフさんデスっ。

オレは一気に手の中にある閃光滅閃弾を床に叩き付けた。

瞬間、強い光と轟音が辺りを支配する……はず。うん。してるはず

ダヨ？　今はまだ視覚と聴覚を遮断してるからわかんないけどねっ！

あっ！　ちなみにこれはただの閃光弾デスヨ？

そこんとこ間違いないよーに。

聴覚再起動。視覚再起動。

ゆっくり目を開く。

ホホホホッ。男子ファンクラブ及び女子ファンクラブほぼ壊滅状態のようすなあ。

運良く人垣で目を潰されなかった奴もいるみたいだけど、このオレのように視覚&聴覚を守るスーパーアイテム（不可視）を付けてる奴はいないみたいだ。

ウム。これが死屍累々というやつかね？

……字も意味もあつてっただけ、これ。

オレは上機嫌で女子ファンクラブの屍を越えていこうかな、とか
なんかか思いながら超強力電磁石入りの靴で壁を歩いてると、後ろ
から声が聞こえてきた。

「まつ、待て！ 不良霧崎！」

「副いんちよが現れた！」

ドラ エのあの曲流れないかな？ あ、なんだっけ？ モンスタ
ーが出てきたときに流れるやつ。

「変な言い方するなっ」

なんか副いんちよがキレた。

「……キレる十代？」

「違う！」

「なんか副いんちよ……怒ってる？」

「そりゃそうでしょ！　こんな所でせんこ」

「でも、まいつか。そんな事は」

「は？」

なんか副いんちよがマヌケ面を曝してる。

「フツ。オレがお前を許したのが意外だったか？　まあ、いつもならオシリペンペンの刑だが、オレはお前を許してやる。オレは寛容だからな。オレは。神が如き優しさを持つオレはなッ！」

フツ。決めポーズも再び決まったぜイ！

さて、なんかぶるぶる震えてる副いんちよはほっという生徒会室へGO！

……にしてもえらい震えてるな、副いんちよ。もしかして、漏るか？　この年で漏っちまうのか！？

……それはそれで……ねえ？　ほら、強気っ子が漏れそうなの我慢しながらもじもじしてる姿は、ねえ？　なんか、上気した頬とか、

ねえ？ 時折ブルツと震える姿とか、ねえ？ なんか、ねえ？ オ
レが言いたいこと、わかるよね？

なんか、そそらね？

いや、いやいやいやいや。別にオレは変態じゃねーですよ？

ただ、その姿が可愛くないかって言うてんの。

そこんとこ間違えないよーに。

ああ、あの姿を見ると思い出すなあ。

麻衣もトイレ我慢してぶるぶる震えてたの。

しかも理由が可愛かった。

「暗いの怖いよあ」って涙目で言うんだぜ？

あの姿を見てそう思わない奴がいたら即刻挽き肉ミンチの胡麻味噌和えにしてやるっ。

……なんか自分で言っというて意味不明だな。

ああ、にしても可愛かったなあ、麻衣は。

ちよつと薄暗くなっただけで一人でいるのが怖いつて、よく服の裾を掴んでオレが離れていかないようにしてたなあ。

トイレに行くのもそうだし、風呂入るのもそうだし、一人じゃ怖くて寝れないからって毎日同じ布団で一緒に寝たなあ。

ああ、可愛い可愛いオレの麻衣。

はあ。あまりに可愛すぎて誘拐とかされないかお兄ちゃん心配で心配で片時も目が離せなかったよ。

手も離せなかったよ。

いや、手は麻衣が離そうとしなかったんだよなあ。

ちっちゃい手でギュッと握ってくる麻衣は、もうめっちゃ可愛かった。もう可愛すぎてパクツとしちゃいたいくらいだたよ。

はあああ。可愛かったなあ。

あ、でも。楓も葵も可愛かったよなあ。

あの、っていうか柚木姉さんの方の血筋には遺伝少女と遺伝ツンデレがあるからね、二人にもすっかり引き継がれてる。

今でこそ楓はあんな感じたけど昔はツンツンしてたし、デレもあった

た。

まあ、今では月に二、三度ツン出るくらいで後はデレオンリーかな。

葵は見ての通りツンを飛び越えて暴力少女に進化？　したからね。
昔は可愛かったのに。

楓はツンを出して無理して我慢するから一度オレの前で漏ってたなあ。

泣きながらオレの胸を叩く中二の少女（見た目少女）ってのはなかなか見れないもんだったなあ。

葵はただ単に漏ってたときもあつたし、蛇見て漏ってたときもあつたなあ。

今では皆懐かすうい。

とかなんとか数十秒ばかり思い出に浸っていると、副いんちよがなんか怒鳴ってきた。

「ちょっと！　そんなバカ面でどこ行くつもりよっ！　下心丸だ出

し変態猿！！」

「バカでもなければ下心もないっ。そして変態猿では断じてないッ。あんまうっさいとバカを呼ぶぞ！」

と言いつつケータイのアドレス帳からバカを呼び出す。

メールではない。電話だ。

理由はものっそい簡単。

《おー。どうした灰斗？》

ケータイからバカの3D映像（ホログラムっやつかな？）が出てくる。

「お前の愛しのハニーが閃光弾でスタボロ制服姿だぞ」

《なにッ！？》

3Dバカが勢い良く振り向く。

そんなことしても見えないけどね。

オレがケータイを動かすか、ケータイの視野拡張機能をオンにせんと見えんのだよ。

まあ、スタボロなのは半分当たりで半分外れだけどね。それに見せる気もないし。

「見たければここに来ればいいだろ。まあ、ここは対能力用特殊加工がされてるから直接は来れんけどね」

《ちくしょうつ。今すぐ行くぜ、真希さん！》

ふはははははっ。バカが真面目な顔してるよ。

しかもケータイ切ってないし。まあ、オレが切るからいいんだけどね。

「副いんちよ。あと三分もせんうちにバカが来るぞ」

「なっ！？　なに赤城を呼んでんのよっ」

副いんちよはバカがあんま好きじゃないらしい。

一応、容姿はいいぞ、アイツ。面倒見も結構いいし、後輩からの人氣もあるし、モテるんだぞ。バカだけど。

まあ、アイツは副いんちよ一筋だから全部断ってるし、何度も副いんちよにコクってるんだよね。その度フラれてるけど。

む？　バカの気配が

「真希さああああん！！」

「げっ！　赤城！」

バカが高速で走ってくる。しかもめっちゃ嬉しそうな顔で。

「副いんちよ。バカから逃げたければ逃げてもいいんだぞ？」

「なに言ってるのよ！　そんなことしたら三人が不良の毒牙につ」

「いや、かかんないからね。三人ともオレの好みのタイプじゃないし」

「なっ！？ アンタ薙原先輩とも知り合いなの！？」

「……どこをどう聞いたらふーきいんちよと関わりあるって思うんだよ」

「……女の感よ！」

「コイツ誤魔化しやがった」

まあ、よ……補導されたり補導されたり補導されたりして関わりあるけどさ。ほかに色々あるけどさ。本人の名誉とかのために黙っておいてあげましょう！ オレ優しい！ オレめっちゃ優しい！ もうイエス顔負けだよ！

あ、ちなみに補導つてのは警察にではなく、ふーきいんにですよ？ そこんと間違えないよーに。

「真希さん！ 大丈夫ですか！？」

あ、バカが来た。

副いんちよの格好を見て、めっちゃ心配そうにしてる。

その表情は、好きな女性だからではなく、純粹にケガ人を心配する人のものだった。

オレにはもう二度と出来ないであろう表情が出来る渡瀬が、少し羨ましいわけねえだろこのすつとこどっこいつ。

あんな顔出来たらバカが移る。バカが。

べつ、別に羨ましくなんかないもん！ そう！ 羨ましくなんか……ない……もん……

と、ツンデレ風に言ってみたり。うまくできたかな？

でもまあ事実だし。あんなツラ、オレがしていい権利は無いからな。それに興味もないし。

「うわっ！？ 寄るな赤城！」

うっわ。副いんちょヒドいな。心配してる人間（と書いてバカと読む）に対して寄るなはないだろ！。

バカはバカで、気にせずケガしてないか確認してるし。

よしっ。この間に壁から天井に移動してっと。

「ではでは」

そのままダッシュ！

「あっ！ まっ、待て！」

「ケガしてるかもしれないんだから動かないで下さい、真希さん！」

「だから寄るな！」

はははははっ。副いんちょ顔真っ赤だよ。茹で蛸顔負けだよ。スイカより赤いよ。

なんて無意味なことを考えながら、みんなの神様霧崎灰斗君は今日もお重を貪り食らうために生徒会室に突入するのであった、まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1063z/>

機械仕掛けの左腕

2011年12月16日19時45分発行